

## 中国における古代貨幣の発生を巡る諸学説について ：『資本論』に基づく経済学的検討

楊, 立国  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494580>

---

出版情報：比較社会文化研究. 15, pp.189-200, 2004-02-28. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン：  
権利関係：

# 中国における古代貨幣の発生を巡る諸学説について

## —『資本論』に基づく経済学的検討—

ヨウ  
楊

リッ  
立  
コク  
国

### はじめに

中国における古代貨幣に関する研究では、貨幣の発生について概ね以下の三種の学説の流れが存在する。時期の順で言えば、20世紀40年代の物々交換による貨幣発生説、同50年代の『資本論』の交換過程論による貨幣発生説とその後の価値形態論による貨幣発生説がある。

言葉の歴史的起源と同じように、貨幣の歴史的発生は大きな謎に包まれている。その解明には長大な時間と膨大な考察を要するであろう。筆者は一人の経済学徒として、中国における貨幣の発生に関する三種の学説のそれぞれ代表的なものを取り上げ、そこに含まれている混迷について、多少とも整理を試みたい。

物々交換と呼ばれるものは共同体的習慣・秩序の下に行われるものと、共同体に関わるものではなく、独立の私有者間で行われると想定されるものとを分けて考察しなければならない。前者、すなわち共同体に関わる物々交換について、その特質の解明には特別な手続きを要しなければならない。結果としては、それは秩序・規則性にともなって、そこから貨幣の発生は有り得ない。後者、すなわち独立の私有者間で行われると想定される物々交換は、現実性が極めて乏しく、しかもそれは結局、商品交換に転化されなければならないのであり、物々交換とは言えないことになる。

『資本論』の交換過程論による貨幣発生説の諸学説には、商品交換と物々交換との相違点に対する理解の欠如によって、貨幣の発生は、分業の拡大→交換の発展→貨幣の発生という過程の中に求められるのである。結局、貨幣を、商品経済の外部から人為的に投入される単なる商業交易の用具としてとらえざるをえなくなる。

価値形態論に基づいて貨幣発生説を説く諸学説においては、価値表現の各形態が交換の歴史的発展と同一視されている。つまり単純な価値形態は偶然的な物々交換の場合において成り立ち、拡大された価値形態は拡大された物々交換において解明しようとされている。結局、貨幣の発生について

は、物々交換から説かれる学説に合流せざるをえなくなる。

本論文で、筆者は将来の研究に対する基礎作業として中国古代貨幣の発生に関する諸学説を辿りながら、自分の理解を加えて、貨幣形態の必然性の論理を再認識することを目的としたい。

### 一 物々交換による貨幣発生説とその検討

物々交換による貨幣発生説とは、貨幣登場以前には、物々交換期のあることが想定され、物々交換の不便を克服するために、貨幣が生まれてくるという説である。中国古代貨幣の発生に関するこの種の学説は20世紀40年代において、登場したものである。

1 王献唐『中国古代貨幣通考』(齊魯書社 1979年)について

1979年出版された王献唐氏の遺著『中国古代貨幣通考』は1946年に完成したものである。中国古代の貨幣、主に周・秦・漢三代の貨幣に対する研究の初期作品である。

王献唐氏は上記した著書の第一篇第一章『序論』において、交換の歴史を概観しながら、貨幣の発生を説いている。

「社会的交易の進化は概ね三期に分けられる。すなわち初めは物々交換期である。その次は貨幣交換期である。またその次は信用交換期である」と交換の歴史を総括している<sup>1</sup>。

第一の物々交換期について氏は、「昔には貨幣がなく、人々は自分の余剰品をもって、互いに交換する。持ち物を出して、欲する物を得る。物品は一つに限らず、時間と場所も決まっていない。『易経・糸辞』には、『日中に、市を為し、天下の民を致し(まねき)天下の貨を集め、交易して退き、各々其の所を得しむ(欲しいものを入手させる)』とある」と述べている<sup>2</sup>。

第二の貨幣交換期について王氏は、「物々交換をしばらくすると、人々はその不便さを感じさせるようになる。ある人が物を所有しているが、その物は必ずしも他の人が欲

1 王献唐『中国古代貨幣通考』2頁。原文：社会交易进化大要分为三期。初为物物交易。次为货币交易。再次为信用交易。

2 王献唐 前掲書 2頁。原文：先民初无钱币，各以剩余用品，彼此互易。出其所有，获其所无。物品不限一端，时地不必固定。易经辞，谓日中为市，致天下之民，聚天下之货。交易而退，各得其所。

するものとは限らない。また、他の人の余剰物が、必ずしもこの人の欲するものとも限らないからである。したがって（両者に求められる）媒介物がしだいに現れてくるようになる。その媒介物は必ずより多くの人々の必需品であって、交換の通用の貨幣になる。このようにして、媒介物は徐々に他の物をはかるものになる。たとえば、布帛が貨幣として用いられると、牛馬を欲するとき、布帛によってその交換比率が決められる。牛一頭であれば、どのぐらいの布帛に値するか、または馬一頭であれば、どのぐらいの粟に値することかが取り決められる。この場合、布帛と粟の役割は、貨幣に相当する」と、貨幣の発生を語っている<sup>3</sup>。

氏は古代中国において粟、干し魚、塩などが媒介物として用いられたと説明し<sup>4</sup>、「経済学者はこれを複数貨幣制度と呼ぶ」と述べて、複数貨幣から金属貨幣への移行について、次のように説明する。

「複数貨幣がしばらく使用されると、またその不便さが感じられるようになってくる。馬と牛は、随時随所に携帯することが容易ではない。魚と羽毛は、永久に貯蔵することができない。物品を貨幣とする場合は分割しにくく、あるいは価値が相応しないものがある、しだいに各媒介物から不便な物は淘汰され、便利な物だけが使われるようになる。良いものは長持ちする。経済が進化すればするほど、交換は頻繁に行われるようになって、複数の貨幣の中からある物が次第に淘汰されていって、最後に残るのは上述した困難を回避できる最も便利的な媒介物である。一つは品質が変わらず、永久に貯蔵できること。一つは任意に分割でき、携帯しやすいこと。一つは量が少なく入手が難しく、色が綺麗であり、実用にも装飾にも利用できること。人々に好まれて日常生活の必需品であること。以上の諸条件が備わっているのは金銀銅類だけである。金銀銅類は最初には複数の媒介物と共存していたが、淘汰によって残されたものである」<sup>5</sup>。

第三の信用交易期について、「複数貨幣から金属貨幣ま

では貨幣による交換の時期である。久しくなると、金属貨幣にも不便さが感じられる。一つは道程が遠い場合、車で運ぶのは困難であること。もう一つは量が多く重さも重く、携帯するには厄介であることである。したがってしだいに改良されて、軽便で簡単化させ、紙幣までに進化し、さらに小切手などまでに進化する。信用によって紙で金属を代用して、信用交換時期に入る」と述べられている<sup>6</sup>。

中国の歴史に合わせて、殷時代は複数貨幣制度の末期で、周時代から金属貨幣の使用が始まり、唐宋以降は信用交換期に入ると、王氏は言っている。

王献唐氏の上述した文章のなかで、本論文に関連して、次の点に注目しておきたい。第一、貨幣発生前には、物々交換が設定されており、物々交換が無秩序、無規則に行われるものと認識されていること。つまり「物品は一つに限らず、時間と場所も決まっていない」ということ。第二、貨幣については、何より物々交換の不便を克服するための媒介物として理解されていること。第三、貨幣発生の動力は「不便」である。すなわち、物々交換において「ある人が物を所有しているが、その物は必ずしも他の人が欲するものとは限らない。また、他の人の余剰物が、かならずしもこの人の欲するものとも限らない」ということ。

2 鄭家相『中国古代貨幣發展史』（生活・読書・新知三聯書店 1958年）について

鄭氏の上記した著書は1958年に出版されたが、「叙言」によれば、1949年にすでに完成されていることがわかる。

鄭氏は上記した著書の第一章「貨幣之起源」において、貨幣の発生を論じている。具体的な内容は鄭氏の「上古時代の貨幣の進化過程表」にそって検討したい。

3 王献唐 前掲書 2頁。原文：物物交易，久而感其弗便。此人所有，不必为他人所需。他人所余，不必为此人所欲。积渐乃有中准。中准物品必人人需要，为一般交易通货。久而据以衡量他物。如通用布帛，欲得牛马，可以布帛比定。若牛一头，值布若干疋，马一匹，值粟若干升。布粟之用，略犹钱币之用。

4 王献唐 前掲書 3頁。原文：因在古代，能为中准之物品，亦甚多。各地出产不同，文明程度又不同。征诸中外，食品类之粟米，干鱼，盐蜜，茶烟。衣著类之羊毛，棉花，皮革。用具类之刀铲，耨耜。装饰类之贝壳，象牙，羽毛，珠玉。动物类之马牛羊。甚如人类之俘虏，奴隶等等，皆曾用为交易中准。（古代において、媒介物とする物品も甚多である。各地の産品が違い、文明の程度も違う。中外のすべてを考証し、食品類には粟、干し魚、塩、蜜、茶と煙草がある。衣服類には羊毛、綿花、皮革がある。用具類には刀铲、耨耜がある。装飾品類には貝殻、象牙、羽毛、真珠、宝石がある。動物類には、馬、牛、羊がある。さらに、人類には捕虜、奴隸がある。これら全ては交換の媒介物として用いられていた）

5 王献唐 前掲書 3頁。原文：复货行久，仍感弗便。马之与牛，不能随意取携也。鱼与羽毛，不能永久藏储也。物体或难割配，价值或难相当。积渐于各中准中，汰其弗便，而用其便者。善善从长，递次去取。经济愈进化，交易愈繁，复货亦愈汰愈少。少而硕果独存，必在各中准中，最利最便，能解除上述一切困难。一须质剂坚凝不变不坏，可以永藏。一须能加分割。多寡随意，便于携用。一须量少难得，色泽妍丽。可以实用，可以装饰。为人人所爱好，日常所必需。殆抵金银铜类，能兼有之。因凡金银铜类，在各中准中，初与他货并行。经淘汰结果，独被采用。用而或为生货，形式不宜。或铸器具，而重量无准。又渐改进，为适宜之形式，正确之重量，演成金属货币。专以交易，不作实用。

6 王献唐 前掲書 3頁。原文：由复货至金属货币皆为货币交易时期。久而金属货币，仍感弗便。道途辽远，辇载困难，一也。币多量重，携取累赘，二也。又渐改善，使轻便简易。演为纸币，演为支票汇票等等。依其信用，以纸为代，复入于信用交易时期。

表1 上古時代の貨幣の進化過程表

人類利用の工具	人類の生活	社会形態	貨幣進化の状況	年代の記載	現在よりの年数
洪荒時代				天、地皇氏	五十万年以上
始石器時代	猿人時代			人皇氏	五十万年
旧石器時代	漁獵・遊牧	原始・氏族社会	物々交換期	有巢氏	五万年
新石器時代	農業時代	氏族社会	秩序ある物々交換期	神農氏	一万五千年
			媒介物交易期	黄帝	
			物品貨幣期	唐	
石銅共用時代	農業時代	氏族社会	製造物貨幣期	夏	四千五百年
		封建社会		商	
銅器時代	農業時代	封建社会	布、刀、貝の貨幣期	西周・春秋	三千五百年
			円錢貨幣期	戦国	

出所：鄭家相『中国古代貨幣發展史』 3～4頁 多少加筆したもの

表について、鄭家相氏は次のようにまとめている。

「貨幣は交換より発生したものである。交換は物々交換から始まる。物々交換は旧石器時代の末期の遊牧時代に氏族共同体間の交換から発生する。前期の漁獵時代には、原始社会であるため交換がなく、貨幣もありえないのである。新石器時代になると、物々交換から秩序ある物々交換に移行し、交換は媒介物を通じて行われるようになって、さらに自然の物品貨幣の段階までに至った。石器と銅器が共用される時代には、自然の物品貨幣から製造の物品貨幣までに進化してくる。銅器時代になって、封建社会の発達によって、非銅製貨幣から銅製貨幣まで変化し、布・刀・貝など多様な貨幣が円形の貨幣によって統一された。貨幣の変化が社会の発展によるものであり、社会の発展は人類の思想と労働の運用によるものである。人類の思想と労働が運用されればされるほど、社会が益々発展する。社会が益々発展すると、貨幣が益々完全となる。発展していない社会には完全な貨幣が生まれることはないであろう」と、説明している<sup>7</sup>。

ここでは、鄭家相氏の貨幣についての理解が明らかにされている。つまり、第一、物々交換より貨幣が発生すること。なお物々交換について、鄭家相氏には、単純な物々交換期と秩序ある物々交換期とが分けられている。単純な物々交換期とは、単に「自分の所有するものをもって、持っていないものと交換する」<sup>8</sup>の時期である。秩序ある物々交換期とは、「市場をつくって、期日を決め、互いに有無を交易し、欲するものを得て退く」<sup>9</sup>の時期である。秩序ある

ということは「市場をつくる」ことを指していることである。第二、貨幣は交換の媒介物の固定によって形成すること。単なる媒介物と貨幣の区別について、氏は次のように述べている。「媒介物はただ腐蝕しにくい、耐久貯蔵だけを条件としているのにたいして、貨幣は以下の六つの条件を有しなければならない。すなわち(一)耐久性、(二)便利性、(三)分割しやすい、(四)量が多い、(五)価格固定、(六)受容性。この六つの条件が備わっているものは完全な貨幣という」と、貨幣とは完全性ある媒介物にすぎないと把握している<sup>10</sup>。第三、貨幣発生の動力は思想と労働の発展であることである。

### 3 物々交換による貨幣発生説の問題点

#### a. 物々交換より貨幣の発生はありうるのか。

物々交換について福留久大氏は、「歴史的地理的に特殊の刻印を帯びた共同体内あるいは共同体間において共同体的慣習秩序の下に行われるもの」と「共同体に関わるものではなく、独立の私的所有者間で行われると想定されるもの」と分けて考察しなければならないと指摘している<sup>11</sup>。

前者、すなわち共同体間の物々交換について福留氏は、マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』に記載される西太平洋におけるクラ交易の状況をあげて、次のように述べている。「貨幣使用経済以前から実施されてきた物々交換は、決して偶発的・不規則的なものではなく、整然とした秩序と規則性によって特徴づけられるものである」<sup>12</sup>。

後者、すなわち独立の私的所有者間で行われると想定される物々交換について、同氏は、「交換に提供され、販売

7 鄭家相『中国古代貨幣發展史』 4頁。原文：貨幣起于交易，交易起于以物易物，以物易物始于旧石器时代之后期，游牧时代，因氏族社会而产生。在前期渔猎时代，因属原始社会，故无交易可言，亦无货币之可言。在新石器时代，由以物易物，进而为有组织之以物易物焉。又进而媒介物焉。又进而自然物货币焉。石铜兼用时代，由自然物货币进而制造物货币焉。至铜器时代，因封建社会之发达，由非铜质货币进而铜质货币焉。由布刀贝多式货币，进而圆形一式货币焉。于是知货币之演进，系乎社会之发展，社会之发展系乎人类思想劳动之运用，人类思想劳动之运用，社会愈发展，社会愈发展货币愈完全，未有社会尚未发展至若何程度，而即有完全之货币也。

8 鄭家相 前掲書 5頁。原文：以我之所有、易我之所無。

9 鄭家相 前掲書 5頁。原文：设立市坐，定日为市，交易有无，各得其所而退。

10 鄭家相 前掲書 9頁 原文：然媒介物仅以不易腐蚀能久储藏为条件若为货币，则须具下列六种条件。(一)质地耐久，(二)携带便利，(三)分割容易，(四)数量充足，(五)价格稳定，(六)认识普遍。能具备此六种条件者，方得谓之完美货币。

11 福留久大 「貨幣機能論の問題状況」 『経済学研究』第67巻第4・5号 282頁

12 同上 283頁

を予定された財貨は、もはや単なる財貨ではありえず、商品として他人に販売されることを第一の目的とするものに変化している」とされている<sup>13</sup>。商品と財貨との分岐点について、福留氏は「単なる財貨と商品との差は、後者が『交換を通して移され』るのに対して、前者は交換に供されることなしに、消費されるところに求められる。つまり、商品は、…なによりもまず交換されねばならないもの、売られねばならないものである」<sup>14</sup>と説明している。

以上の見解のよれば、物々交換と貨幣発生との関連について、概ね次の結論がつけられるであろう。

共同体間における物々交換は、秩序・規則性のあるものであって、貨幣がなくても、交換も規則的に行われる。そこには、貨幣の発生を説明する根拠はない。他方、独立の私有者間における物々交換は極めて現実性が乏しいと言わざるを得ない。この場合、たとえ交換が行われても、物々交換ではなく、商品交換に変化してくる。貨幣が必然的に発生するが、発生した貨幣は物々交換によってではなく、商品交換によるものである。

王献唐氏と鄭家相氏のいう物々交換は未開の社会において、共同体間の物々交換に属するものであろう。それは、決して簡単に「物品は一つに限らず、時間と場所も決まっていな」と断定できない。共同体間の物々交換はその特質の解明には、特別の手続きを要することを指摘しなければならない。

b. 貨幣とはまず交換の媒介物であるか。

物々交換の不便を克服するために貨幣が何よりもまず交換の媒介物として生まれてくるというのは、王献唐と鄭家相両氏の共通の認識である。しかし、貨幣とはまず交換の媒介物であるという理解は正しいのか。

貨幣を媒介物として把握されると、まず商品（あるいは物、王・鄭両氏には、商品と物との区分がないようであるから）を貨幣と対等な地位が与えられる。ところが、商品にとっては、売れない可能性はいつでも存在しているのに対して、貨幣は、いつでもどこでも何物でも入手できる強大な力をもっている。貨幣の商品に対する優位性ははるかに大きいといわざるを得ない。これについて、福留氏は「購買手段」という言葉を使って、次のように説明している。商品——貨幣——別の商品という貨幣を用いた取引においては、「貨幣所有者の貨幣と商品所有者の商品との『交換』過程は、正確には貨幣による商品の購買過程であり、その裏面として商品の販売過程が実現しているわけで

ある。したがって貨幣は直接的には購買手段として機能しているものであり、商品の販売は貨幣所有者の欲求が前提されて始めて実現されるものとしてある」<sup>15</sup>と鋭く指摘している。

商品に対して強大な力を持っている貨幣は、まず購買手段の機能を発揮するものとすべきである。

c. 貨幣形成の動力は思想と労働の発展であるか。

労働生産力の発展につれ、交換に入ってくる物品の数と多様性が增大する。これによって、交換の不便を克服するために媒介物としての貨幣を登場させなければならないという理解は、王・鄭両氏の貨幣発生論のもう一つの共通点である。

そこで、貨幣はあたかも交換の便利的な工具として、人間の発明物のようなものとしてとらえられている。したがって、貨幣の特質の解明には、貨幣素材にたよらなければならない。王氏のいわゆる「人々に好まれて日常生活の必需品」というものであって、鄭氏も上述したように「完全なる貨幣」には六つの条件が備わらなければならないゆえである。

貨幣発生の必然性は商品に内在する使用価値と価値との矛盾にあり、価値形態においてしか解明できないのである。この点について、第三章で再び触れたい。

## 二 交換過程論による貨幣発生説とその問題点

1 王毓銓『中国古代貨幣的起源和發展』（中国社会科学出版社 1990年、初版は1957年）について

王氏の上記した著書の第二章「我国最早的貨幣——貝」は五つの節によって構成されている。その中の「一、貨幣的発生」（貨幣の発生）の終わりの部分に注記を加えて、王氏は次のように説明している。「以上の貨幣発生の理論についての分析は『資本論』第1巻第2章「交換過程」によるものである。その中のある文章は『資本論』の原文のままである」<sup>16</sup>。つまり、第一節は貨幣の発生の理論である。この部分は本論文に深く関連するものであって、やや長いので、全文を翻訳しておく。

「マルクスは言う。貨幣は一つの結晶である。必要のため交換過程から形成した一つの結晶である。貨幣の発生する前に異種の労働生産物は交換過程において実際にはお互いに直接的に交換される。直接的な交換によって労働生産物は商品になる。元来、商品のうちに、使用価値と価値と

13 同上 287頁

14 福留久大 『資本と労働の経済理論』 64頁

15 福留 前掲論文 291頁

16 王毓銓 『中国古代貨幣的起源和發展』 15頁。原文：以上关于货币发生的理论分析均据《资本论》第1巻第2章《交换》而作，有好些字句几乎还是《资本论》的原文。

の対立が潜んでいる。一つの商品は、商品の所有者にとって価値であるが、交換相手にとっては、使用価値である。商品は価値と使用価値とを対立させる統一物である。交換の歴史的な広がりとは拡大は商品のうちに眠っているその対立を展開させる。商業交易のために、使用価値と価値との対立を外的に表現する必要がある。この必要は一つの完全な価値形態が要請される。この要請は、休みなしに続き、最終的には、商品と貨幣との商品の二重化にまで到達する。言い換えれば、一つの独立な価値形態を完成する要請は最終的に一つの商品を商品世界から分離させ、この商品は貨幣になる。

この独立な価値形態、すなわち貨幣形態はどのように形成されたのか、マルクスの分析によって、次のように形成される。直接的な物々交換において、どの商品もその商品の所有者にとっては直接に交換手段であり、それを欲する人にとっては、等価物である。それゆえ、交換歴史の最初の段階において交換された物品はそれ自身の使用価値から分離する独立な価値形態をまだ受け取っていないのである。ところが、一つの独立的な価値形態が必要である。しかるに、この形態の必要性は交換される商品の数と多様性とが増大するにつれて発展する。マルクスは言う。商品所有者たちが自分の商品を他の一つの物品、なお一つの同じ特殊な物品と価値として比較するということなしには、大規模商品交換は決して行われぬ。この特殊な物品は他の商品の等価物となることによって狭い限界のなかではあるが、既に一般的な、社会的等価物の性質をもつようになる。この一般的な、社会的等価物の性質はそれを生み出した一時的な社会的接触と一緒に発生し消滅する。それは一時的にあれこれの商品に付着する。しかし、交換の発展につれ、それはしっかりと、かつ排他的に特別な商品種類だけに固着する。結晶となり、貨幣形態を受け取る。

この一般的な、社会的等価物としての性質がどんな特殊な商品種類に付着するのかは、はじめは偶然である。しかし、二つの事情が事柄を決定する。それはある外来の最も重要な交換物品に付着するか、または域内で生産されるある使用対象に付着する。前者の場合、外来の交換物品は事実上、域内生産物の交換価値の原始的な自然発生的な現象形態である。後者の場合、使用対象は地方産の譲渡可能な財産の主要要素をなしている。

中国古代貨幣の発生と発展の歴史事実（以上の）マルクスの理論に完全に合致している。中国古代において、ある特殊な商品が貨幣形態を受け取る前述した二つの事情は、ともに存在していた。かつ、典型的な発展様式を取っていたのである。貝は外来の自然物品であって、布と刀は中国域内の生産される譲渡可能な使用対象であった<sup>17</sup>。

以上の王氏の文章については、次の点を注目しておきたい。第一、貨幣発生論の理論では、『資本論』の交換過程論だけを強調していること。第二、貨幣の出現前の状況として物々交換が設定されており、この物々交換について明確な規定が与えられていないこと。第三、第二と関連して、商品交換の概念がかならずしも明確にされていないこと。第四、価値形態が交換の歴史的発展の過程と関係づけて、交換の発展は貨幣形態を形成させると理解されていること。

2 朱活「試論我国古代貨幣の起源」について  
『文物参考資料』1958年第8号において朱活氏の上記の論文が発表されている。以下では、論文のマルクス貨幣発生論の理論を利用するところを中心として、貨幣の発生に対する朱活氏の理解を明らかにする。

氏の論述は、『管子』や『史記』などの古文献の古代貨幣に関する記述を引用するところから始まった。引用したあと、氏は、「中国貨幣の起源および金属鑄貨の出現の時期について、古文献によるだけでは十分でない。しかし、

17 王毓铨 前掲書 14～15 頁。原文：马克思说，货币是一种结晶，是在交换过程中因必要而形成的一种结晶。货币未发生以前，在交换过程中，不同的劳动生产物在实际上是彼此对较。由于对较交换，那些劳动产品就转变成了商品。原来，在商品中潜伏着使用价值和价值之间的对立。一件商品对于它的所有者说是价值，对于要交换获得它的人说是使用价值；商品是价值与使用价值的对立统一。交换的历史的进展和扩大发展了那个在商品内部潜在着的对立。为了适应商业交易的目的，就需要给使用价值和价值之间的对立一个外表的表现；这种需要就要求建立一个独立的价值形态。这个要求不停地继续下去，一直到最后被商品分化为商品和货币所满足为止；换句话说，建立一个独立的价值形态的要求，最后终于使某种商品从一般商品中分化出来而变成了货币。

这种独立的价值形态——货币——是怎样建立起来的呢？据马克思的分析，那个过程是这样的。在直接以物易物的交换中，每一种商品对它的所有者都是直接的交换手段，对于需要它的人都是对等物。所以，在交换发展史初级阶段中，被交换的物品还没有获得一个离开它们本身的使用价值而独立的价值形态。可是，一种独立的价值形态是必要的，而且这个必要随着交换商品数量和种类的增多而增长了。马克思说，商品所有者不能大规模地交换他们的商品，除非那些商品所有者把他们的商品的价值对较一个，而且同一个，特别的物品。这个特别的物品，因为变成了其他商品的等价物，立即获得了一般的社会的等价物的性质，虽然还在狭隘的限度以内。这个一般的社会的等价物的性质，随着使它发生的短暂的社会行为，出现或消失；它时而附着于这种商品上，时而附着于那种商品上。但终于因交换的发展，它最后把自己牢固地并且排他地固定于某些特别的商品上，变成了结晶，取得了货币形态。

这个一般的社会的等价物性质固着于那个特别商品上，当初是偶然的。但有两个情况起了决定的作用。它或者是把自己附着于一种最重要的外来的交换品，它或者是附着于本社会内部生产的一种有用的东西。在前一种情况下，外来的交换品事实上就是本社会内部生产物交换价值所借以表现的原始的自然的形态；在后一种情况下，那有用的东西就是土产的可以转让的财富的主要部分。

我国古代货币的发生和发展的史实，完全符合马克思的分析。在我国古代，使某些特别商品具有了货币形态的上述两种情况，都存在过，而且采取了典型的发展形式。贝壳货币是外来的自然品，布和刀则是我国社会内部生产的而且可以转让的有用的东西。

われわれは貨幣の発生と発展の法則によって、歴史的資料と考古学的資料とを結びつけて、それを解明することができる<sup>18</sup>と述べ、「貨幣の発生と発展の法則」について、次のように説明している。

「マルクスはわれわれに指摘したように、『貨幣の分析におけるおもな困難は、貨幣が商品そのものから発生するということが理解されれば、たちまち克服される』（『経済学批判』第二章、人民出版社1955年、35頁——原作者注）」<sup>19</sup>。

「マルクスは『資本論』の中で貨幣の発生について、科学的な論断をしている。すなわち、『貨幣結晶は、…交換過程の、必然的な産物である。交換の歴史的な広がりや深まりとは、商品の本性のうちに眠っている使用価値と価値との対立を展開する。この対立を交易のために外的に表そうという欲求は、商品価値の独立形態に向かって進み、商品と貨幣とへの商品の二重化によって最終的にこの形態に到達するまでは、少しも休もうとしない。それゆえ、労働生産物の商品への転化が実現されるのと同じ程度で、商品の貨幣への転化が実現されるのである』（『資本論』第一巻第二章、人民出版社1953年、72～73頁——原作者注）」<sup>20</sup>。

「マルクスの分析によると、貨幣は交換過程の必要のために結晶したものである。交換の歴史的な広がりや深まりは、交易の便益のため、必然的にある商品が他の商品の等価物になることを要求し、最終的にはある種の商品は商品世界から分離して、貨幣形態を受け取る。要するに、貨幣は商品の交換過程を通じて、商品世界から分離し、他の商品に対立する特殊な商品である」<sup>21</sup>。

「どんなものが最初に貨幣形態を受け取るのか。違う地

域と違う状況の下では、結果も違うのであるが、必然の成り行きがある。（これについて）マルクスは言う。『二つの事情が事柄を決定する。貨幣形態は、域内生産物の交換価値の実際上の自然発生的な現象形態である外来の最も重要な交換物品に付着するか、または域内の譲渡可能な財産の主要要素をなす使用対象に付着する』（『資本論』第一巻第二章、人民出版社1953年、75頁——原作者注）」<sup>22</sup>。

「マルクスの貨幣発生論によって、中国古代貨幣の発生と発展の状況を考察すれば、まったくその通りである。外来の自然物品としての貝（あるいは玉にも可能性がある——原作者注）は遅くとも殷時代の後期に貨幣形態を受け取る。一方、中国社会内で生産された譲渡可能な有用物品である生産工具「錢」（また「鏹」——原作者注）と刀が違う地域と違う時期で相次いで貨幣形態を受け取る」<sup>23</sup>。

以上のように、貨幣の発生と交換とが深く関連していることを認識した後、朱活氏は次の問題を設定している。「貨幣が必要のため交換過程の中から形成された結晶である以上、交換はどのように生じたのか」<sup>24</sup>という問題である。

「交換は最初には偶然性を帯びていた。しかし、牧畜業の発展は遊牧部落と農業部落との分業、すなわち第一次社会分業を引き起こした。この分業のため、農業民と牧畜人らは、相互に部落内で獲得できないものを需要することによって、交換の発展をもたらした」<sup>25</sup>と、朱活氏は交換と分業との関係を語っている。中国歴史において、夏代初期から牧畜業がかなり発展してきたと朱活氏は判断し、また「中国の新石器時代後期の遺跡から、遠隔地の素材で製造された精巧な石斧とその他の装飾品が発見され、貝は南か

18 朱活 「試論我国古代貨幣の起源」 『文物参考資料』1958年第8期所収、以下同 34頁。原文：关于我国货币起源及金属铸币出现的时间，文献实不尽足证；可是，我们根据货币发生与发展的规律，结合史籍和地下发掘的实物，还是可以进行探索的。

19 朱活 前掲論文 原文：马克思指示我们说：“货币的根源是在于商品的本身，只要理解了这一点，货币分析上的主要困难就已经克服了。”（政治经济学批判第二章，人民出版社1955年版，第35页）。『経済学批判』の文章の日本語訳は、国民文庫版、杉本俊朗訳 大月書店1953年版を参照したものである。

20 朱活 前掲論文。原文：马克思又在资本论里对于货币的发生作出这样的科学论断：“货币结晶，是交换过程的必然的产物。……交换之历史的扩大与加深，又发展了在产品性质中睡眠着的使用价值与价值的对立。为便于交易，把这种对立外部地表现出来的需要，要求有一个独立的商品价值形态，并不绝地进行，后来才由商品分化为商品与货币的过程，最后地把它取得。劳动生产物越是转化为商品，商品转化为货币的过程就依比例越是完成。”（资本论第一卷第二章，人民出版社1953年版，第72～73页）。『資本論』の文章の日本語訳は、国民文庫版の岡崎次郎訳『資本論』①を参照したものである。以下同

21 朱活 前掲論文。原文：据马克思的分析，货币是一种在交换过程中因必要而形成的一种结晶。由于交换历史的扩大与加深，就必然要求有某种商品变成其他商品的等价物，以便于交易，最后终于使某种商品从一般商品中分化出来取得了货币形态，也就是说，货币在商品交换的过程中，从一般的商品中分离出来，成为一种与其他商品相对立的特殊商品。

22 朱活 前掲論文。原文：有哪些东西首先取得了货币形态呢？在不同的地区和不同的情况下结果也不一样，不过有一种必然的趋势，马克思说：“有二种事情有决定性的影响。货币形态或是附着于最重要的外来的交换品，那在事实上就是内部各种生产物的交换价值之自然发生的现象形态。或是附着于家畜一样的使用对象，那是内部各种可以让渡的财产的主要要素”（资本论第一卷第二章，人民出版社1953年，75页）

23 朱活 前掲論文。原文：依据马克思的货币起源的理论，来考察我国古代货币的发生和发展的情况，也恰恰如此。贝这种外来的自然品（玉也有可能），起码在商朝的后期已经取得了货币形态；另一种我国社会内部生产的可以转让的有用的东西——生产工具钱（或「鏹」）和刀，在不同的地区和不同的时期也曾先后取得了货币形态。

24 朱活 前掲論文。原文：货币既然是交换过程中因必要而形成的一种结晶，那么交换又是怎样产生的呢？

25 朱活 前掲論文。原文：交换最初是带有偶然性的，但由于畜牧业的发展引起了游牧部落和农业部落的分工，即第一次社会大分工，由于这次分工，农人和牧人都需要他们在部落内部不能获得的物品，因而引起了交换的发展。

らの自然物品として、早く彩陶遺跡の中ですでに見えられていた（例えば、山西芮城の彩陶遺跡——原作者注）。中国の古代の文献中には、『日中、市を為して天下の民を致し（まねき）天下の貨を集め、交易して退き、各々其所を得しむ（欲しいものを入手させる）』とある。これは氏族部落間の交換状況を語っているものである<sup>26</sup>と、考古学的資料及び歴史文献から交換の存在の確認を努めている。

続いて朱活氏は、「社会分業の発展と交換の拡大について、並の庶民格の商品のうちから、『他のすべての商品の価値をきっぱりと表現できる一つの王侯格の商品を選び出す』（エンゲルス『反デューリング論』第三篇 人民出版社 1956年 325頁——原作者注）。選ばれた商品は常に他の商品と交換され、『絶えず行われる』ことを通じて、最終的に貨幣形態を受け取るまでは長い歳月を要しなければならない<sup>27</sup>と述べている。

以上の朱活氏の議論によって、次の点を見出すことができる。すなわち、第一、朱活氏のいわゆる「貨幣の発生と発展の法則」は、主に『資本論』第1巻第1篇第2章「交換過程」を指すものであること。第二、貨幣は交換の便利のために、「交換過程の必然的な産物」と認識されており、交換について、物々交換と商品交換とを混同しているようにみえること。第三、貨幣の発生は、分業の発展→交換の拡大→貨幣の発生という流れの中に求められていること。

### 3 交換過程論による貨幣発生説の問題点

#### a. 『資本論』の「交換過程」について

従来、「交換過程」をめぐって、特に価値形態論と関連して「交換過程」の位相について、議論が重ねられている。その中、「交換過程」不要説が大勢を占めているようである<sup>28</sup>。中野正氏は、『経済学批判』→『資本論・初版』→『資本論・再版』というマルクスの著作の流れを辿りながら、綿密な考証的研究を遂行しつつ、その結論として、「（価値）形態論と（交換）過程論との位相は、マルクス自身の構成のなかでも、大きく動揺していることがわかる。それは古典派から脱化しようとするマルクスの形態規定の論理と、それをうしろからひっぱっているマルクスにおけ

る古典派の残滓＝直接的な交換過程の論理との相克する動揺とみうるであろう」としている<sup>29</sup>。

マルクス自身において克服の対象であって多くの弱点の残されている交換過程論のみが強調され、理論的根拠として用いられること自体は大きな問題を招きかねないのではないかと考えられる。

#### b. 商品交換と物々交換との相違点について

王・朱両氏は、商品交換と物々交換とを分けて貨幣の発生を考察しようとする視点に欠けているように見受けられる。前述したように、物々交換から貨幣の発生はありえない。貨幣は商品交換において必然的に発生するものである。それゆえ、商品交換と物々交換との相違点を明らかにしなければならない。

『資本論』においてマルクスは、商品交換の成立の条件を次のように規定している。「諸物は、それ自体としては人間にとって外的ものであり、したがって手放されうるのである。この手放すことが相互的であるためには、人々はただ暗黙のうちにその手放されうる諸物の私的所有者として相対するだけでよく、また、まさにそうすることによって互いに独立な人として相対するだけでよい。とはいえ、このように互いに他人である関係は、自然発生的な共同体の成員にとっては、存在しない。…商品交換は、共同体の果てるところで、共同体が他の共同体またはその成員と接触する点で、始まる」<sup>30</sup>。

すなわち、第一に、物がその所持者にとって、自分の直接的欲望をみたく以上にあることである。第二に、物の所持者が互いに独立な人として、互いに他人である関係において相対することである。この二つの条件を満たせば、はじめてこの物は商品となりうる。

しかし、共同体内部においては、原則的に互いに他人であるという関係は存在しない。共同体の成員間関係は、共同体という有機体の分枝と分枝との関係にほかならないからである。それゆえ、共同体内部では、商品交換の発生はありえないのである。はじめての商品交換は共同体の果てるところ、だれかが共同体を離れて、独立した人として

26 朱活 前掲論文。原文：从我国新石器时代晚期的遗址中，能发现非本地产材所制成的精制石斧和其他装饰品，贝这种来自南方的自然品，早在彩陶遗址中就有发现(如山西芮城礼教村彩陶遗址)。我国古代文献中又有“日中为市，致天下之民，聚天下之货，交易而退，各得其所”(易经系辞)的记载，这种记载是形象的描绘了氏族公社间进行交换的情况。

27 朱活 前掲論文。原文：因为随着社会分工的发展和交换的扩大，从一般的商品中“选出一种贵重的商品，而其余一切商品的价值，都可以永久由这一商品来表现。”(恩格斯：反社林论第三篇，人民出版社1956年版，第325页)由于这一种商品经常与其他种商品交换，经过“不绝的进行”才最后完成它的转化过程，这就必须经过相当长的岁月。エンゲルスの文章の日本語訳は、大内兵衛・細川嘉六監訳した『マルクス＝エンゲルス全集』第20巻 大月書店 1968年版 317頁を参照した。

28 宇野弘蔵氏は「交換過程は理論的展開としては、不要と思っている」と言っている(向坂逸郎・宇野弘蔵編『資本論研究』至誠堂142頁)。宇野『経済原論』をはじめとして、日高晋『経済原論』有斐閣、および大内力『経済原論』東京大学出版会、鈴木鴻一郎『経済学原論』東京大学出版会、山口重克『経済原論講義』東京大学出版会、桜井毅・浜田好通・春田素夫・山口重克・永谷清・河西勝『経済原論』世界書院なども「交換過程」が省かれている。

29 中野正 『中野正著作集』第一巻『価値形態論』321頁

30 マルクス 『資本論』岡崎次郎訳 国民文庫版① 160～161頁

行われる交換である。商品があらゆる商品と交換されるものでなければならないのであって、商品交換は一商品と他の特定の商品との交換ではなく、貨幣によって媒介されなければならないものである。

古代中国における氏族共同体社会で行われる交換は、秩序ある共同体間の物々交換であることを否定されないであろう。そこには貨幣発生の根柢がないといわざるをえない。それゆえ、朱活氏のような分業の発展→交換の拡大→貨幣の発生という論理は必ずしも成立しないと言わざるを得ない。

また、王氏の価値形態論に関する理解の問題点は次の章で集中的に検討したい。

### 三 価値形態論による貨幣発生説とその検討

1 蕭清『中国古代貨幣史』（人民出版社 1984年）について

蕭清氏は上記した著書の第一章第一節「我が国の貨幣の起源」の中の「一、我が国の最初の貨幣：貝」において中国古代貨幣の発生を論じている。

歴史文献、考古発掘資料及び甲骨文・金文資料の貝に関わる記載に基づいて、次のように述べられている。

「単に古文献、甲骨文、金文あるいは天然貝の形や数からだけ判断して、当時の社会の発展段階、経済発展と交換の状況を無視するならば、貨幣の起源がうまく解明できないし、貨幣発生の時期も判明できない」<sup>31</sup>と、交換重視の視点が打ち出された後、とくに、貨幣の発生と交換および価値形態との関連について、「われわれが知っているように、貨幣の発生は交換発展の歴史と深く関連している。どんな交換水準があって、それに応じて、どんな価値形態あるいは交換の等価物もある」<sup>32</sup>と主張されている。続いて、中国の交換の歴史を回顧して、北京原人における交換存在の可能性から、新石器時代の交換発生の基礎としての財有物の存在まで辿られて、つぎの文章が続く。

「当時の交換水準は、まだ物々交換の段階を越えていなかった。この時期は中国古代の神農の氏『日中、市を為し』の時期であった。『易经・糸辞』にはこの時期の交換状況

が述べられている。『日中、市を為して天下の民を致し（まねき）天下の貨を集め、交易して退き、各々其の所得しむ（欲しいものを入手させる）』とあって、これは（当時の交換についての）いきいきとした描写である。明らかに、氏族社会時期の物々交換（部落間、家庭間、及び各生産者個人間の交換を含む——蕭清）は、偶然的なまたは拡大された価値形態のみを有して、貨幣形態がありえないのである」<sup>33</sup>。ここで、注意しておきたいのは 蕭清氏は「偶然的なまたは拡大された価値形態」を物々交換と同一視していることである。

殷時代に至って、手工業と農業との社会分業につれ、交換が発展されてきた。「夏・殷時代、とくに殷代では、交換の範囲も拡大された。…有名な殷墟周囲の墓葬の中に、常に貝が発見されただけでなく、大量の亀甲、海蚌、鯨や鯔の骨、玉石なども発見された。これらはあるものが東海や南海で産出され、あるものが新疆で産出され、あるものが東北からもたらされた。いずれにしても、交換あるいは貢納によって遠いところからもたらされてきた。…それゆえ、第三次社会的分業、すなわち商業の出現もすでに顕著になった。…このような事実と状況によって、また甲骨文と殷代金文に『囚貝』『取貝』『賜貝』『賞貝』の記述があることによって、『尚書』の中に貝玉を欲求し貝を『貨宝』と意識する記述が存在していることと関連して、われわれは貝が既に貨幣であると判断することができる」<sup>34</sup>と述べられている。

つまり、蕭清氏は、氏族社会の時期の物々交換は、単純な価値形態および拡大された価値形態に相当すると認識し、貨幣形態は、交換の拡大に伴う価値形態の発展によって形成されると理解している。蕭清氏の文章によって、次の二点を確認することができる。第一、単純な価値形態および拡大された価値形態が物々交換または拡大された物々交換と同一視されていること。第二、貨幣形態の出現は交換の発展の結果であると理解されていること。

2 千家駒・郭彦崗『中国貨幣史綱要』（上海人民出版社 1986年）について

千家駒・郭彦崗氏の上記した著書の第一章「中国古代貨幣是怎样產生的」（中国古代の貨幣はどのように発生した

31 蕭清 『中国古代貨幣史』 32頁。原文：单纯地证引古史书、甲骨卜辞、钟鼎金文，或仅从天然贝的形状、数量着眼，而脱离了当时社会发展阶段，经济发展和交换状况，都是无法正确地阐明货币的起源，判定货币的产生的年代的。

32 同上。原文：我们知道，货币的产生与交换发展的历史密切相关，有怎样的交换发展水平，就有与它相适应的价值形式，或交换的等价物。

33 蕭清 前掲書 33頁。原文：当时的交换发展水平，并未超出“物物交换”的阶段，这一时期就是我国古老传说中的神农氏“日中为市”的时期。《易经·糸辞》描述这一交换情况说：“日中为市，致天下之民，聚天下之货，交易而退，各得其所”，就是一幅生动写照。显然，氏族社会时期的物物交换（包括部落间、家族间、以及各个生产者间的交换），只具有偶然的和扩大的价值形式，还不能有货币。

34 蕭清 前掲書 34～35頁。原文：夏商时期，尤其是商代，交换的范围也扩大了。…著名的安阳殷墟周围的商代墓葬中，不但普遍地发现了海贝，而且还有大量的龟甲、海蚌、鲸鱼骨、鯔骨、玉等，它们有的产于东海和南海，有的产于新疆，有的来自东北，都是远方交换或贡献来的。…所以这时，第三次社会大分工，即商业的出现也很显著了。我国历史上的“商人”（作买卖的人）之名的就是和商人的商业行为相联系的。对于这些事实和情况，我们再联系甲骨卜辞和商代金文中的许多“囚贝”、“取贝”、“赐贝”、“赏贝”的记载，以及《尚书·盘庚篇》中人们贪求贝玉，把贝视为“货宝”的记述，便能判定贝已经是货币了。

のか)は三つの節によって構成されている。すなわち、第一節「中国貨幣の起源」、第二節「中国古代貨幣の成長」、第三節「秦統一幣制」である。そのうち、第一節の「一、貨幣は商品経済発展の産物」(貨幣は商品経済の発展の産物である)では、千・郭氏は、『資本論』の商品・貨幣理論とくに価値形態論に基づいて、貨幣の発生の理論を論じている。

上記した著書の中で、価値形態論は次のように始まる。

「鉄がその重さを自分によって表現することができず、秤で測定する必要があると同じように、商品自身が自分の価値を表現することはできない。別の異種商品との交換を通じて、相対的に表現されなければならない。たとえば、二十斤の穀物は五尺の布と交換される場合、五尺の布は相対的に二十斤の穀物の価値を表現している。五尺の布は二十斤の穀物の交換価値または価値形態である。…価値形態は商品生産と商品交換の発展にともなって発展する。歴史上に、順によって四つの価値形態が出現している。すなわち単純な価値形態、拡大された価値形態、一般的価値形態、貨幣形態である」<sup>35</sup>。

この文章によって、次の点を見出すことができる。第一、価値形態が商品交換関係と同一視されている。つまり、二十斤の穀物＝五尺の布という価値表現の形態は、二十斤の穀物が五尺布と交換されることを意味すると説かれている。第二、価値形態の展開と商品交換の歴史的発展とが同一視されている。しかも商品交換の発展は原因であり、価値形態の展開はその結果であると理解している。

このような認識の下で、千・郭氏は単純な価値形態について、「原始社会の初期、生産道具の粗末さによって生産力が低く、生産されるものもきわめて少ない。人々は群をなして住み、共同で労働し、共同で消費し、余剰生産物がないため、交換もない。社会生産力が徐々に発展するにつれ、余剰物が出現して、部落・氏族あるいは個人の間で、偶然的な交換が発生する。例えば、甲には穀物の余りがあったが、麻布が足りない。乙には生産された麻布の余りがあっ

たが、穀物が足りない。そして、ある偶然の機会に、甲と乙がばったり合い、互いに有無を交換し、一回の偶然的な交換が発生する。穀物で麻布と交換することによって、穀物の価値が偶然的に麻布で表現される。この交換関係あるいは穀物と麻布この二つの商品の価値関係において、穀物は麻布でしか自身の価値を表現することができない、麻布は穀物の価値を表現する材料になる。穀物は主動的であり、相対的価値形態にある。麻布は受動的であり、等価物の役割を果たしている。このような人類の最初の交換関係は、物々交換であり、生産物の直接的交換であって、「単純な偶然的な価値形態」といわれる。…この価値表現形式はとても単純で、且つ常に発生するものではなく、交換の機会、時間、対象、交換の比率は偶然的な性質をもっている」と説明している<sup>36</sup>。

ここでは、第一、単純な偶然的な価値形態が偶然的な物々交換と同一視されている。この点は、蕭清氏も同じような理解を示している。商品の価値形態は、商品の交換関係において分析されている。つまり、「穀物＝麻布」という単純な価値形態は、穀物と麻布との交換が成立してはじめて穀物の価値が麻布によって表現されるのである。第二、単純な価値形態の「単純」の理由は交換の偶然性にあると認識されている。こういう二つの点が注目される。

続いて、千・郭氏は拡大された価値形態について、次のように述べている。

「生産力の持続的な発展によって、第一次社会分業が出現する。すなわち、農業と牧畜業との分離である。物々交換の範囲が拡大され、一種の商品が常に多くの異種の商品と交換される。例えば、二十斤の穀物で、ある時一本の弓と交換される。またある時は、三枚の毛皮と交換される。またある時には、二本の石斧と交換される。等々。こうして、ある種の商品の価値は、すでに偶然的に他の異種の商品に表現されることではなく、常にこの種の商品とあの種の商品に表現されるようになる。商品価値表現の範囲が拡大され、このような価値表現形態は『拡大されたあるい

35 千家駒・郭彦崗 『中国貨幣史綱要』 9頁。原文：就像一块铁不可能表现自身重量，要用秤来测定一样，商品本身无法表现自己的价值，只有在与另一种商品的交换中才能得以相对的表现。如二十斤粮食换五尺布，五尺布就相对地表现了二十斤粮食的交换价值或价值形式。…价值形式随着商品生产和商品交换的发展而发展，在历史上曾依次出现四种形式：简单价值形式，扩大价值形式，一般价值形式，货币价值形式。

36 千家駒・郭彦崗 前掲書 9～10頁。原文：在原始社会初期，生产工具简陋，生产力很低，产品极少，人们群居，共同劳动，共同消费，没有多余产品，也就没有交换。社会生产力逐渐发展，产品略有剩余，在部落、氏族或个体之间，偶然地发生了交换。例如，某甲的粮食有多余，但缺少麻布。而某乙生产的麻布有多余，但缺少粮食。这样，在一个偶然的机会里，某甲和某乙碰巧遇上，就互通有无，发生了一次偶然性的交换。这就用粮食去同麻布相交换，粮食的价值偶然地在麻布上表现出来。在这个交换关系中，或者说粮食同麻布这两个商品的的关系中，粮食只能通过麻布表现自己的价值，麻布则成为表现粮食价值的材料。粮食起主动作用，它的价值表现为相对价值；而麻布起被动作用，它起等价物的作用，这是同一价值表现的互相排斥的对立的两极，也就是商品的价值和使用价值相对立的简单表现形式。这种人类最初的简单的交换关系，是物物交换，是产品的直接交换，叫做“简单的偶然的价值形态”。…这种价值表现形式很简单，交换不是经常发生的，在交换的机会、时间、对象和数量比例上，都带有偶然的性质。

37 千家駒・郭彦崗 前掲書 10頁。原文：随着生产力继续发展，出现第一次社会大分工，即农业和畜牧业的分离，物物交换的范围扩大，一种商品经常地同许多商品相交换。比如，二十斤粮食有时去换一张弓，有时又换三张兽皮，有时又换两把石斧，等等。这样，一种商品的價值，已经不仅是偶然地在另一种商品上表现出来，而是经常在这种或那种商品身上得到表现。商品价值表现的范围扩大了，这样的价值表现形态，叫做“扩大的或总的价值形态”。

は総合的な価値形態』と呼ばれる」<sup>37</sup>。

ここでは、千・郭氏は第一、拡大された価値形態を拡大された物々交換と同一視している。この点は蕭清氏と同じである。第二、価値形態が拡大された動力は労働生産力の発展にあって、労働生産力の発展→物々交換範囲の拡大→価値形態の拡大という式を成立させようとしている。

一般的価値形態について、「以上の二つの価値形態は生産物の直接的交換であって、不安定なものである。商品価値の表現には一つの共通的な単位が欠けているため、必然的に商品交換の困難を引き起こす。社会分業と商品交換関係の発展にともなって、生産者たちはしだいに自分の商品をまずみんなに受け入れられ、しかも常に交換される物と交換し、その後、またこの商品で、欲する物と交換するようになる。多数の交換の実践によって、自分の商品で直接に他の商品と交換するよりは、こうしたほうがより便利であることが人々にはわかる。こうして、多くの商品から自発的に一種の交換媒介物としての商品が分離され、商品の交換は、この媒介物を通じて行われるようになる。他の商品の価値も、この交換媒介物の働きを持つ商品によって表現される。このような価値形態は『一般的価値形態』という。…一般的等価物の出現後、商品交換は本質的に変化した。直接的物々交換から一般的等価物を媒介物とする間

接的交換に発展する」と、千・郭氏は説明している<sup>38</sup>。

この文章によって、次の点を抽出することができる。第一、拡大された価値形態から一般的価値形態へ移行する動力が「社会的分業と商品交換の発展」であること。第二、交換の媒介という機能がまず形成され、価値を尺度する機能がそれに付属するものとして形成される。第三、一般的等価物の成立する理由が「みんなに受け入れられる、しかも常に交換される」事実に求められていること。第四、一般的等価物の成立は直接的物々交換からの間接的な物々交換の成立をも意味すること。

最後に貨幣形態について、以下のように述べている。

「商品交換の発展に応じて、各地で使用されている一般的等価物がしだいに地域の制限を突破し、人々は自然に違う地域の違う一般的等価物を統一する。統一の過程において、家畜、毛皮などを一般的等価物とするのは非常に不便であることが気づく。これらは交換されるときに、以下のような欠点がある。質的には統一性を持っていない。分割・結合しにくい。携帯、貯蔵にも不便である。金属にはこのような欠点が避けられるだけでなく、また特殊な利点がある。すると、しだいにある種の金属を一般的等価物に充てるまで発展してくる。その他の商品の価値はこの金属を通じて表現されるようになる。これは『貨幣形態』と呼ば

表2 中国古代貨幣の進化過程表

人類工具	人類生活	社会形態	貨幣進化の状況	年代の記載	現在よりの年数
洪荒時代				天、地皇氏	50万年以上
始石器時代	猿人時代			人皇氏	50万年
旧石器時代	漁獵・遊牧	原始・氏族社会	物々交換期：単純な価値形態の始まり	有巢氏	5万年
新石器時代	農業時代	氏族社会	秩序ある物々交換期	神農氏	1万年
			媒介物交易期（亀殻、猟具、農具、穀物、布帛、石器）	黄帝	5000年
			物品貨幣期（以上は単純な価値形態から拡大された価値形態まで）	唐	4400年
石銅共用時代	農業時代	氏族社会から奴隷社会まで	製造物貨幣期（貝など）	夏	4100年（約前21～前16世紀）
		奴隷社会	貝貨を主とする。金珠玉も貨幣とする（以上は拡大された価値形態から一般的価値形態まで）	商	3600年（約前16～前11世紀）
銅器時代	農業時代（手工業と商業が発達し、木、鉄製の道具と農具が既に出現）	封建社会	銅製貨幣の発展期、布刀貝貨幣も形成し始める	西周	3100年（約前11世紀～前771年）
			布、刀の体系が完備し、銀貝、銀空首布などが出現	春秋	2754年（約前770年～前474年）
			布、刀、円銭、楚幣の四つの体系が完成	戦国	2459年（約前475年～前221年）
			貨幣制度が統一される	秦	前221～前207年

出所：千家駒・郭彦崗『中国貨幣史綱要』249～250頁

38 千家駒・郭彦崗 前掲書 11頁。原文：以上两种价值形态都属于产品的直接交换，是不稳定的，它们缺少一个共同的单位来表现商品的价值，必然引起商品交换的困难。随着社会分工和商品交换关系的发展，生产者逐渐把自己的商品，先换成一种大家都愿意接受而又可以经常用来交换的商品，然后再用这种商品去换取所需的商品。在多次的交换实践中，大家都觉得这样做比过去用自己的商品去直接交换更为方便。这样，就从许多商品中，自发地逐渐分离出一种作为交换媒介的商品，其他商品的交换，都通过这个媒介物来进行。而其他商品的价值，也就在这个起交换媒介作用的商品上表现出来。这样的价值形态，叫做“一般的价值形态”。…一般等价物出现后，使商品交换发生了本质的变化，从直接的物物交换，发展为通过一般等价物作媒介物的间接交换。

39 千家駒・郭彦崗 前掲書 11～12頁。原文：为了同不断发展的商品交换相适应，各地使用的一般等价物，逐渐突破地区界限，人们很自然地逐渐把不同地区的不同的一般等价物统一起来。在统一过程中，人们发现用牲畜、兽皮等作一般等价物很不方便，它们在交换时有以下缺点：质量不统一，不便分割和合并，携带储藏都不便。金属不仅可以避免这些缺点，还有特殊的优点，于是就逐渐发展到由某种金属充当一般等价物，其他商品的价值都通过这种金属表现出来，这就是“货币的价值形态”。

れる」<sup>39</sup>。

この文章の要点を整理すると、第一、貨幣形態が商品交換の発展に対応したものと認識されている。第二、金属が貨幣として選ばれた理由はその一般的等価物としての適性にあるとされている。

### 3 価値形態論による貨幣発生説の問題点

#### a. 価値形態の展開は、交換の歴史的発展の過程であるか。

千・郭氏は『中国貨幣史綱要』において、前述した鄭家相氏の「貨幣の進化過程表」を参照して、前記の表(表2)を作っている。

鄭氏の表(表1)と比較して、表2には特徴をなしているのは、価値形態が歴史の各時期に置かれていることである。例えば、「単純な価値形態の始まり」は歴史上では旧石器時代(約5万年前)の物々交換期に相当する。単純な価値形態から拡大された価値形態までは、新石器時代(約4400年前)の物品貨幣期に相当する。拡大された価値形態から一般的価値形態までは石銅共用時代(約3600年前)の貝貨の時期に相当するとされている。

しかし、価値形態論は決して交換の歴史的発展の過程と関係づけるものではない。それは、商品の交換に入る前の価値表現のメカニズムを解明する理論であって、その解明によって、なぜ貨幣が必然的に発生するのかを明らかにするものである。マルクスは価値形態論の課題について、「いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学によってただ試みられたことさえないこと、すなわち、この貨幣形態の生成を示すことであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである。これによって同時に貨幣の謎も消え去るのである」と述べている<sup>40</sup>。つまり、マルクスは価値表現の最も単純な姿から貨幣形態までのプロセスを追跡することによって、なぜ貨幣が必然的に発生するのかを価値形態論の課題として論じている。この価値表現のメカニズムの解明によって、「貨幣の謎も消え去る」のである。「貨幣の謎」とは、商品社会において、商品を持っていても望みのままに貨幣と交換できる(つまり商品売って貨幣を入手できる)とは限らないのに対して、貨幣を持っていれば、いつでもどこでもどんな商品でも購入できる(つまり貨幣を支払って商品を手にいれることができる)というように「貨幣は商品に対して格段に強大な万能の力を持っている」<sup>41</sup>、その力がどこから生ずるかという謎である。

#### b. 単純な価値形態は物々交換を意味するのか。

蕭清氏にも千・郭氏にも、価値形態が交換関係の中に置かれ、単純な価値形態を原始社会の物々交換と同一視していることは、諸氏の著書の分析によって明らかにした。

しかし、単純な価値形態はけっして直接的な物々交換を意味するものではない。単純な価値形態——「20エレのリンネル=1着の上着 または20エレのリンネルは1着の上着に値する」(千・郭氏には、二十斤の穀物=五尺の布となっている)においては、商品リンネルの所有者としてはさしあたり1着の上着という使用価値の一定量を求めている、この1着の上着に対置させて自分が所有するリンネルのなかから適当と思われる20エレという量を取り、もしだれか上着1着を交換に提供するものがいれば、それとひきかえにいつでもただちに20エレのリンネルを渡そう、と申し出ていることを意味している。この場合、価値を表現しているのは、あくまでも商品リンネルの側であり、交換を求めているのは、この商品の所有者の方である。こういう意味で商品リンネルは能動的な役割を担うのである。一方、商品上着の所有者はかならずしもリンネルとの交換を求めているわけではなく、実際また現実にリンネルに対して交換に提供しなくてもよい、ただリンネル所有者の観念的なものにすぎないのであって、受動的な役割を演じている。ここでとりわけ重要なのは、「20エレのリンネル=1着の上着 または20エレのリンネルは1着の上着に値する」という価値表現はリンネルの所有者の側からする主観的な評価によるものにすぎず、彼の上着所有者に対する一方的な交換要求を示すものでしかないということである。上着の所有者はリンネルとならば上着を交換に出さないと考えるかもしれないし、交換しようと考えたとしても20エレのリンネルとならば自分に不利になるので、こういうことはしないかもしれない。つまり、単純な価値形態において、二人の所有者が現実に向き合って、相互にその所有物を交換する、いわゆる直接的物物交換とは、内容を異にするのである。単純な価値形態は相対的価値形態に立つ商品の一方的な主張ないし提示によって、商品の価値表現の基本的形態を抽象したものであって、等価形態にある商品が商品として市場に登場してきてはいなくて、まだ相対的価値形態にある商品所有者の観念のなかにあるにすぎないものである。

リンネルと上着と直接的交換の場合、必ずリンネルの所持者と上着の所持者が市場に出てきて、双方の合意に基づいて、互いに持ち物を交換する。リンネルの所持者にとっても、上着の所持者にとっても矛盾は何もなく交換して済むのであって、貨幣形態への発展の動力が完全に失われる

40 マルクス 前掲書 93~94頁

41 福留 前掲書 76頁

のである。それゆえ、単純な価値形態を物々交換と同一視するのは、最初から価値形態論を否定することになるのである。

## おわりに

「銭は山のように積まれ、川のように流れる。その動と静とは時宜を得ているし、流通・収蔵には節目がある。市場では使用に便利で取り扱いも容易であり、摩耗や折損を心配することはない。銭の命脈を絶とうとしても、天が定めた寿命のように続く。尽きることはないのは、あたかもどこまでも続く道のようなのである。だから、銭はよく長続きし、世の神宝となっているのである。……翼もないのに飛び、足もないのに走る。……『銭』という言葉は、こんこんと湧き流れ広がる『泉』を意味し、どんな遠い所でも行き、どんな奥深いところにも至る。」

これは西晋時代(265~316年)の人物である魯褒の著した『銭神論』の中の有名な一節である。貨幣の本質を迫るこの文は貨幣の流通と収蔵を文学的に表現し、貨幣が中国社会で定着して以降、あらゆる場所に行き渡ったと比喩的に述べられている。

『銭神論』にいうように、人間の統制に応えない貨幣であるゆえに、貨幣が神とされた。貨幣は人間にとって多くの謎に包まれている。その謎を解明するために、それぞれ歴史学・考古学・人類学・経済学の成果に基づいて光が当てられなければならない。本論文は中国における古代貨幣の発生を巡る諸学説を概観したものであり、浩瀚な学問の海洋の中に、ごく小さな一滴として、貨幣の理解に対して少しでも役だてば、筆者にとって大きな喜びである。

## 参考文献

(日本語)

- 宇野 弘蔵 (1950)『経済原論』上 岩波書店  
 大内 力 (1981)『大内力経済学大系』第二巻 経済原論上 東京大学出版会  
 向坂逸郎・宇野弘蔵編 (1958)『資本論研究』至誠堂  
 桜井毅・浜田好通・春田素夫・山口重克・永谷清・河西勝 (1997)『経済原論』世界書院  
 鈴木 鴻一郎 (1959)『価値論論争』青木書店  
 (1960)『経済学原理論』上 東京大学出版会  
 中野 正 (1987)『中野正著作集 第一巻 価値形態論』日本評論社  
 日高 普 (1983)『経済原論』有斐閣  
 福留 久大 (1995)『資本と労働の経済理論』九州大学出版会  
 山口 重克 (1985)『経済原論講義』東京大学出版会

(中国語)

- 鄭家相 (1958)『中国古代貨幣發展史』生活・読書・新知三聯

書店

朱活 (1958)『試論我国古代貨幣的起源』『文物參考資料』1958年第8期所収

王献唐 (1979)『中国古代貨幣通考』齊魯書社

蕭清 (1984)『中国古代貨幣史』人民出版社

千家駒・郭彦崗 (1986)『中国貨幣史綱要』上海人民出版社

王毓銓 (1990)『中国古代貨幣的起源和發展』中国社会科学出版社